

山梨大学における学生参画型高大接続事業の実践報告

—協力学生への教育効果に関する予備的考察—

吉田 翔太郎 (山梨大学)

本研究では、山梨大学における学生参画型高大接続事業の実践を報告し、協力学生への教育効果を探索的に考察する。山梨大学ではアドミッションセンター設置以降、高大接続プログラムを実施してきたが、2022 年度からは協力学生の教育効果を主要な目的の一つとして位置づけた新たな試みを展開している。2 年間の試行を通じて、延べ約 100 名の学生が参画し、企画段階からの関与や生協学生委員会との協働体制の構築など、プログラムの基本形が確立された。現時点での教育効果の把握は初期的な段階にとどまるが、協力学生からは企画・運営力の向上や大学への理解深化等を示唆する声が聞かれており、高大接続事業の新たな方向性を示している。

キーワード：高大接続、入試広報、学生参画

1 はじめに

山梨大学アドミッションセンター（以下、「センター」という。）は、高大接続の調査、研究及び推進を主たる業務の一つとしており、そのうち高大接続・入試広報部門を主として、「高大接続事業」である高校教員向けの「山梨高大接続に関する研究会（高大研）」と、高校生向けの「高大接続プログラム（UY-Navi）」を実施している。

高大接続プログラムはセンターが設置された 2016 年度から実施されていたが、2022 年度から実施内容を見直し、第 1 回実施後の反省会を契機として、プログラムの企画・運営に関わる在学生の教育効果を主要な目的の一つとして位置づけた新たな試みへと発展した。このような試みは、学生参画型の高大接続・入試広報活動の新たな方向性を示すものといえる。

本研究では、山梨大学における学生参画型高大接続事業の実践を報告し、高大接続・入試広報活動における学生参画の新たな可能性、特に協力学生の成長を主要な目的の一つとして位置づけることの意義を考察する。まず、他大学における先行研究と取組事例を概観し、これまでの高大接続・入試広報活動における学生参画の特徴を整理する（2 章）。次に、山梨大学において協力学生¹⁾の教育効果を主要な目的の一つとして位置づけるに至った背景と問題意識を述べ（3 章）、2 年間の実践内容について報告する（4 章）。そして、協力学生への教育効果を把握するための初期的な試みについて述べ（5 章）、実践から得られた示唆と今後の課題を整理する（6 章）。

2 他大学の取組状況と先行研究

近年、多くの大学で、出身校訪問、SNS での情報発信、オープンキャンパスでの運営など、学生参画型の高大接続・入試広報活動が実施されている。国立大学に限定した状況として、福島大学の「メッセージプロジェクト」や群馬大学の「学生広報大使」、東京外国語大学の「TUFS アンバサダー」、茨城大学の入試広報学生スタッフなど、出身校訪問や SNS での情報発信、オープンキャンパスでの運営など多様な形で学生が活動に参加している。北海道大学や旭川医科大学の「メディカル・キャンプ・セミナー」、北海道教育大学の「授業づくり体験会」など、教育と連携した取組も見られる。また、京都工芸繊維大学のダヴィンチ入試体験や金沢大学の「高大接続ラウンドテーブル」など、入学者選抜に関連する形での学生参画もあり、島根大学では入学前教育に在学生が関わるなど、様々な場面で学生が重要な役割を担っている²⁾。

これらの取組みの多くは「大学広報・入試広報に学生視点を入れる」という観点から行われており、その実践報告も広報活動としての有効性を主に論じている。例えば永田（2011）は広島大学における学生による広報活動への参画実践を報告しており、観察による企画力・コミュニケーション能力の向上や情報教育の側面についても言及しているものの、それらは付随的な成果として触れられているに過ぎない。

また、和久田（2018）は学生成長を企図した島根大学における出身高校訪問の実践を報告しており、事後アンケートを通じた自己評価によるプレゼンテーション能力等の成長を明らかにしている点で貴重な実践報告である。しかし、「広報活動の側面についての期

待がある」(和久田, 2018: 244) と述べるにとどまっておき、かつ高校訪問という志願前の段階の者に対する活動である点で、「大学広報・入試広報に学生視点を入れる」という枠組み内の取組みといえる。

さらに、喜村・大塚 (2020) による高知大学での共通科目「初めてのマーケティング」や平井・一ノ瀬 (2024) による信州大学での共通科目「高大接続におけるデータサイエンスゼミ」など、正課教育との連携により学生の学びを意図的に組み込む実践も報告されている。しかし、これらは正課教育の一環として実施されており、高大接続・入試広報活動とは異なる文脈で展開されている。

このように、既存の取組は「入試広報のための人材活用」と「正課教育との連携」という二つの方向で発展してきており、協力学生の成長そのものを目的として掲げた高大接続・入試広報活動の実践は管見の限り見当たらない。本研究における学生参画型高大接続プログラムは、入試広報活動でありながら協力学生の教育効果を主要な目的の一つとして位置づけた点に特徴がある。この実践報告を通じて、高大接続・入試広報活動における新たな可能性を提示することを目指す。

3 研究の背景と問題設定

山梨大学の第 4 期中期計画では、「山梨大学に入学したい生徒を増大させる」ために、「高校生にとって真に魅力のある高大接続教育プログラムを拡充させる」こと (山梨大学, 2022a: 2) , そして「学部在学中に、学生自ら学ぶ姿勢を習得」させることを掲げている (山梨大学, 2022a: 4) 。

この計画設定の背景には、大学選択における偏差値偏重への問題意識がある。1980 年代半ばの臨教審答申で偏差値による志望校決定モデルが批判されてから約 40 年が経過したが、「山梨大学で学びたいと決めた理由」における「センター試験 (共通テスト) の成績で決めた」の割合は、2013 年 36.9%→2018 年 46.4%→2021 年 40.6%と推移している (山梨大学, 2022b: 5) 。

このことは、近年の新入生アンケート結果からも明らかになっている。 신입生全員に実施するプレイスメントテスト学修観アンケートでは、出願決定時期などを問うており、そこからは一般選抜入学者の 7 割以上が共通テスト受験後に出願を最終決定していることが明らかになっている (図 1) 。

諸要素を勘案しつつ共通テストの成績で最終決定している可能性など、共通テスト前後の決定は、受験戦略上の理由や、テスト結果を踏まえた現実的な判断で

ある可能性も高く、この情報のみで「不本意入学」を判断することはできない³⁾。しかし、より早い段階から大学の特色を理解し、主体的に志望校を選択することの重要性は依然として高いと考えられる。

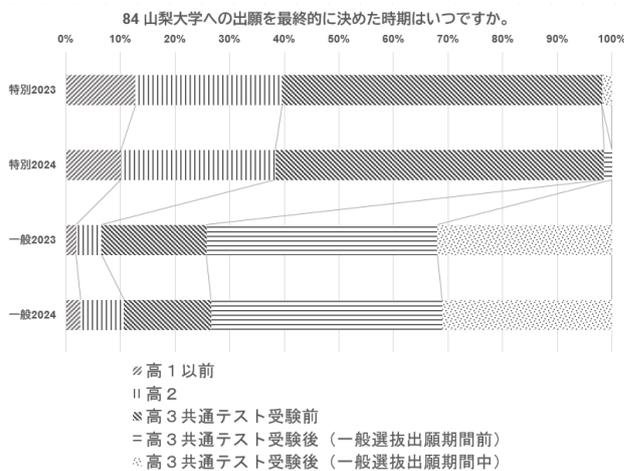


図 1 新入生アンケート結果

このような状況を踏まえ、本学では二つの課題に対する方策として、学生参画型高大接続プログラムの実施を構想した。第一の課題は、「偏差値」や大学入学共通テストの成績によらず山梨大学に入学したいと考える生徒の増加である。第二の課題は、協力学生自身が山梨大学に入学したことの意義を再確認し、主体的な学習者へと転換することである。

具体的には、多くの在学学生をプログラム運営の企画段階から携わらせ、学生自身が山梨大学の魅力を考え発信する機会を持たせる。そこで「山梨大学に入学したい生徒」を増加させるという課題に取り組むことで、課題解決能力を涵養するとともに、「自校教育」としての効果も期待する。そして在学学生が生き生きと活動し、自らの言葉で大学の魅力を発信する様子を高校生に見せることで、山梨大学に入学したい受験生を増やすという好循環を生み出すことを企図した⁴⁾。

以上の背景を踏まえ、本研究では「協力学生の教育効果を主要な目的の一つとして位置づけた学生参画型高大接続プログラム」の実践について報告する。そして、プログラムの企画・運営への参画を通じた協力学生の経験と成長の可能性を探索的に考察することで、高大接続・入試広報活動における学生参画の新たな可能性を示す。

4 山梨大学における学生参画型高大接続プログラムの実践

本章では、2022 年度から 2023 年度にかけての高

大接続プログラムの実践内容を報告する。2022 年度は学生参画型プログラムの基本形を模索した時期であり、2023 年度はその発展期として位置づけられる。以下では、プログラムにおける協力学生の関与度の深化に注目しながら、その発展過程を記述する。なお、本プログラムは高大接続・入試広報活動における新しい試みであることから、実践の詳細な記録として、各回の具体的な内容や経緯についても可能な限り記述することとした。

4.1 2022 年度の実践

2022 年度は、従来の高大接続プログラムを学生参画型へと転換させていく模索期であった。特に、第 1 回での経験を踏まえた第 2 回実施後の反省会を契機として、学生の企画段階からの参画が実現し、その後の方向性が定まった点が重要である。各回の実施内容等は表 1 のとおりである。

表 1 2022 年度 UY-Navi 実施内容

回数	実施日	内容
第 1 回	2022年7月22日	プログラムの説明 講義：高校生のキャリア形成 学部からの案内 第 2 回や課題の案内 学部毎の分散会
第 2 回	2022年9月30日	第 1 部 学生によるトークセッション 第 2 部 交流会（高校生限定）、相談会
第 3 回	2023年3月17日	第 1 部 学部横断企画 大学紹介動画放映、梨大生によるトークセッション、 キャンパスツアー 第 2 部 学部別交流会

2022 年 5 月、高大研幹事会において、従来県内高校を中心に実施してきた高大接続プログラムを「山梨高大接続に関する研究会（高大研）」の枠組みから独立させることが決定された。これを受け、アドミッションセンターは新たなプログラムの企画・検討を行った。

検討の結果、2021 年度試行のプログラムを基盤としながら、既存の「公開授業」やオープンキャンパスとの連携を図り、県内外の高校生を対象とした意見交換・交流中心の内容へと再構築することとなった。実施時期は公開授業直前の 7 月下旬と、オープンキャンパス終了後の 9 月の計 2 回とし、名称を University of Yamanashi Navigation for Future Students (UY-Navi) と定めた。

第 1 回はオンラインで実施し、第 1 部ではキャリアセンター専任教員による「高校生のキャリア形成」の講義と、各学部による学部紹介および夏のイベント（公開授業・オープンキャンパス）の案内を行った。第 2 部では 2021 年度のプログラムを参考に、学生主

体での学部別分散会を実施した。

結果、県内外から 66 名の参加があり、そのうち 3 年生の約 8 割が実際に出願するなど、一定の効果が見られた。しかしながら、学部からの協力教員（部門員）が第 2 部の企画運営を担い、協力学生はその「運営」に協力する役割を担うにとどまった。このように第 1 回開始時点では学生参画型ということが強く意識されていたわけではなかった。

第 1 回終了直後に参加者アンケート及び協力学生による運営アンケートを実施した。運営アンケートからは、学生たちが現役大学生ならではの視点や情報提供の可能性を強く意識していることが明らかになった。これを受けて開催したオンライン反省会では、協力学生から企画段階からの参画を望む声が多く聞かれ、高校生の立場に立った内容づくりや、学生同士での意見交換の重要性が指摘された。

この反省会での議論を通じて、学生たちは単なる運営スタッフではなく、プログラムの企画者としての当事者意識を強く持ち始めていた。センターはこれらの声を受け止め、第 2 回では企画段階から学生の参画を促すこととした。具体的には、プログラムの構成や内容について学生主体で検討する企画会議を設けたほか、高校生への広報資料の作成や当日の進行についても、学生の意見を積極的に取り入れることとした。

この判断は、結果として学生参画型高大接続事業としての方向性を決定づけることとなった。以後、協力学生は企画・運営の中心的な担い手として、プログラムの改善・発展に主体的に関わっていくこととなる。

第 2 回（オンライン）では、高大研「山梨県内高等学校と山梨大学との入学試験等に関する情報交換会」の大学説明動画を事前配信するなど既存コンテンツを活用した。また、学生に依頼して作成した山梨大学の紹介動画をオープニング動画として使用した。ここで特筆すべきはプログラムの運営は、相談会を除き学生が中心となり、司会や企画、当日の進行を担当したことである。トークセッションの話題提供者への依頼はセンター専任教員が行ったものの、具体的な内容は学生が企画した。また、第 1 回の「分散会」を「交流会」に名称変更し、これと並行して事前申込制の「相談会」（高校教員・保護者向け）をブレイクアウトルームで実施し、高大接続部門員が質問対応を行った。この回で今後の UY-Navi の基本形が構築され、当日は 42 名の参加があった。ただし、開催時期については、第 1 回から間が空きすぎている点や、夏休み明けで参加しづらいといった課題が指摘された。

当初予定にはなかった第 3 回は、入学前教育とし

て計画されていた「入学前合格者懇談会」を、学部横断的な交流イベントとして実施することとなった。3月上旬の協力学生との打ち合せを経て、3月下旬に対面とオンラインの2回実施することが決まり、トークセッションに加え、大学紹介動画の放映やキャンパスツアーも行うこととなった。プログラムは第2回の対面版を基本としつつ、初の試みであることからセンター専任教員が台本や進行の詳細を準備したという限界はあったが、協力学生が具体的な運営を担当する形式とした。なお、大学の公式行事として実施要領とチラシを合格通知に同封し告知を行った。

当日はオンライン回を含め160名が参加し、「先輩との対話で大学生活への不安が解消された」「交流を通じて友人ができた」など、好意的な感想が多く寄せられた。一方で、同時期にGI（注4を参照）が実施していた同様のイベントの参加者が減少するという課題も生じた。これは、GIがオンライン開催、UY-Naviが対面開催という違いに加え、マスク着用の任意化や5類移行といった「コロナ禍明け」の状況が影響したと考えられる。なお、GIから6名（工学部5名、生命環境学部1名）がUY-Navi協力学生として活躍していたこともあり、次年度に向けてGIとの共催を検討する必要性が共有された。また、後期合格発表前という日程設定も、多くの合格者の参加可能性という点で課題として残された。

4.2 2023年度の実践

2023年度は、前年度に確立した基本形を踏まえつつ、学生の主体性をより重視したプログラム運営を目指した。特にGIとの連携強化を図り、学内の学生組織との協働体制の構築を進めた点が特徴である。各回の実施内容等は表2のとおりである。

表2 2023年度 UY-Navi 実施内容

回数	実施日	内容
第1回	2023年7月21日	プログラムの説明 学部からの案内 第2回や事前アンケートの案内 学部毎のミニ相談会
第2回	2023年8月25日	第1部 梨大生によるトークセッション 第2部 学部毎の交流会
第3回	2024年3月28,29日	開会式 第1部 学部横断企画 ゲーム、梨大生によるトークセッション キャンパスツアー 第2部 学部・学科別交流会 閉会式

第1回（オンライン）は教職員のみで運営し、プログラムの説明後、学部部門員による「学部からの案内」として学部概要や夏のイベント（公開授業・オープンキャンパス）の紹介、さらに学長メッセージの発

信を行った。参加者からは教職員の丁寧な対応や質問への親身な回答について好意的な声が多く寄せられた。一方で、参加者数は27名にとどまり、昨年度からの大幅な減少が課題として残された。

第2回（オンライン）は、8月8日の協力学生との打ち合わせを起点に準備を進めた。Teamsを活用したオンラインでの情報交換を重ね、昨年度の基本形（トークセッション+学部別交流会）を踏襲して実施した。トークセッションの話題提供者には、参加者との年齢が近い1年生を中心に、昨年度のUY-Navi参加者からセンター専任教員が依頼した。当日の参加者は26名（うち14名が第1回参加者）であり、さらに出願率も59%と前年度から減少した。また、参加者数の低迷から、実施時期や「第1回と第2回のセット参加」という形態にも課題が見られた。

第3回は昨年度に引き続き入学前教育として「入学前合格者懇談会」を実施することとし、11月から12月にかけてGIとの調整を進めた。その結果、GIとの共催が決定し、後期日程合格者も参加可能な3月最終週に対面での2日間開催が決まった。内容は昨年度確立したUY-Naviの基本形（トークセッション・交流会）と、従来実施してきたGIイベントの要素（アイスブレイク・ゲーム）を組み合わせたものとなった。トークセッションは1年生を中心に専任教員が依頼したが、GI側からも担当者の提案があったほか、台本や進行の詳細も協力学生が主体的に作成した。センターは会場予約や告知、物品購入といった後方支援に徹した。

結果として364名（新入生の約4割）が参加し、「入学前の不安解消」「他学部生との交流」「新たな友人作り」など、好意的な感想が多く寄せられた。一方で、GIとの共催は実現したものの、新たな課題も明らかになった。センターの関与が見えづらくなったことや、GI主導の内容検討によりGI非所属の協力学生が検討過程に十分関われなかったこと、さらには協力学生の学部学科による偏りなどである。

4.3 協力学生の参画状況

本節では、2年間の実践における協力学生の実態を、人数、所属、学年、性別の観点から整理する。これにより、プログラムの発展に伴う学生参画の変化を明らかにする。

2022年度から2023年度にかけて、計6回のUY-Naviを実施した。ここでは、教職員のみで運営した2023年度第1回を除く5回分の協力学生の実態を整理する（表3）。協力学生の延べ人数は、各年度約

50名、合計約100名であり、これは山梨大学の学部在籍学生数3,788名(2023年5月時点)の約1.3%にあたる。参加回数別にみると、5回全てに参加した学生が1名、4回参加が2名、3回参加が3名、2回参加が23名となっている。また、2023年度の協力学生のうち7名(2回全て参加3名、第3回のみ参加4名)は、前年度にUY-Naviに参加者として関わった学生であり、プログラムの循環的な発展が見られ始めている。

表3 年度・回数別 UY-Navi 協力学生数

年度	第1回	第2回	第3回	合計
2022	16	16	20	52
2023 -		19	34	53
合計	16	35	54	105

学部別の協力学生数を見ると、学部による偏りが明確である(表4)。山梨大学の学部別入学定員は、教育学部15%、医学部22%、工学部44%、生命環境学部19%の構成だが、協力学生の分布はこれと大きく異なる。特に医学部と工学部からの参加が少なく、教育学部と生命環境学部からの参加が多い傾向が見られる。なお、2023年度はGIとの連携強化により、GI所属学生の多い生命環境学部の割合が一層増加した。医学部からの参加の少なさは、プログラムの全学的な展開という観点から重要な課題となっている。

表4 年度・学部別 UY-Navi 協力学生数

年度	教育学部	医学部	工学部	生命環境学部	合計
2022	17	8	15	12	52
2023	12	5	15	21	53
合計	29	13	30	33	105

学年別の構成にも、年度間で大きな変化が見られる(表5)。2022年度は教員推薦による選出もあり、大学院生を含む3年生以上が約3割を占めていた。一方、2023年度は1・2年生が約9割を占め、特に1年生の割合は3割から5割へと大きく増加した。連携を強化したGIは1・2年生が中心の組織であることから早計な評価は避けるべきだが、1年生の間でのUY-Naviの認知度の高まりが示唆される。

表5 年度・学年別 UY-Navi 協力学生数

年度	1年	2年	3年	4年	5年	6年	修士課程	合計
2022	17	19	7	4	3		2	52
2023	26	21	3	2		1		53
合計	43	40	10	6	3	1	2	105

協力学生の性別構成にも特徴的な傾向が見られる(表6)。2022年度は男女同数であり、2023年度には女子の参加者が増えて比率が高まり、男女比が約3:7となった。これは女子比率が低い医学部と工学部からの協力学生が少ないことが一因と推測されるものの、学部在籍学生の男女比(約7:3)と比べると、女子学生の参加率が高いことを示している。なお、工学部では令和6年度入試から学校推薦型選抜Iに女子枠を設けるなど、大学全体として女子比率向上を推進しており、その観点からも、高大接続プログラムでの女子学生の活躍を身近に感じられる機会の提供は重要な意味を持つ可能性がある。

表6 年度・性別 UY-Navi 協力学生数

年度	女	男	合計
2022	26	26	52
2023	36	17	53
合計	62	43	105

2年間の実践を通じて、以下のような発展が見られた。第一に、学生の関与度が段階的に深化し、企画立案から運営までを主体的に担う体制が構築された。第二に、GIとの連携強化により、組織的な協働体制が整いつつある。第三に、1・2年生を中心とする協力学生の確保により、活動の継続性が高まっている。一方で、医学部からの参加者が少ないなど学部間での偏りや、効果的な引継ぎ体制の構築など、いくつかの課題も明らかになった。これらの課題への対応は、プログラムの安定的な運営に向けて重要な点となる。

5 教育効果の検証に向けた初期的な取組み

本プログラムにおける協力学生への教育効果の検証は、現在も模索段階にある。本研究では、プログラムの実施過程で収集した限られたデータをもとに、協力学生への影響を探索的に検討する。なお、効果検証の方法論自体は今後の検討課題であり、本章で示す分析

はあくまでも初期的な試みとして位置づけられる。

5.1 現状の効果把握の方法

プログラムの実施過程では、運営改善を主な目的として、プログラム終了後の振り返りアンケートをオンラインで実施してきた。2023 年度第 2 回終了後では協力 19 名中 10 名 (回答率 53%)、第 3 回終了後では協力 34 名中 21 名 (回答率 62%) から回答を得た。なお、回答期限は開催後 1 週間と設定した。アンケートでは、「プログラム全体や自分の関わり方について、改善したほうがよいと思われる点 (その理由と改善策まで記入をお願いします。)', 「プログラム全体や自分の関わり方について、良かった点 (今後の運営等にもいかせる点があれば記入をお願いします。)', 「運営を通して感じたこと、考えたこと」について自由記述形式で尋ねている。これらの項目は、教育効果の測定方法を厳密に検討し設計されたものではないが、協力学生の回答からは、活動を通じた成長の一端を垣間見ることができる。

5.2 協力学生の声から見る効果

アンケートの自由記述からは、主体的な学びの基盤となる能力である企画・運営力の向上、第二に、自身の学びの意味を再確認することにつながる大学への理解深化、そして、社会人として求められる基礎的な能力の育成に寄与するコミュニケーション能力の向上の 3 つの側面における成長の可能性が示唆された。以下、各側面について、具体的な記述を示しながら検討する。

まず、企画・運営力の向上に関して、「内容を学生が決めることができ、主体となってきた」「積極的に企画等運営に取り組めた」といった声が聞かれた。また、大学への理解深化については、「私たち学生の体験や学生目線の梨大を伝えるということを意識した」「高校生の受験を踏まえて役に立つ情報が共有できるようにスライド作成や話をするのができた」といった記述が見られた。さらに、コミュニケーション能力の向上に関して、「一定以上のコミュニケーション能力が必要で、バイトなどの接客業とはまた違う力が必要だと気づきました」「司会者としてゲーム中など教室内を回って多くの新入生と少しずつ話したり聞いたりして回るのも楽しく、先輩相手ならではの雰囲気でも仲良くやりとりできていた」といった成長実感が述べられている。

5.3 効果検証の課題と展望

現状の効果把握には多くの課題がある。まず、デー

タ収集の観点では、教育効果の測定を厳密に検討された上での設問項目が設定されていないことである。また、回答率にも改善の余地がある。比較の視点についても、他の学生活動との比較や、協力学生と非協力学生との比較、さらには経年での変化を把握する仕組みが整っていない。

効果検証の充実に向けては、アンケート項目の改善や定期的な振り返りの機会の設定など、短期的に実施可能な取り組みから着手する必要がある。また、中長期的には協力学生の追跡調査や教育効果の指標開発なども検討課題となる。ただし、これらの取り組みには予算や人員体制の確保が必要であり、現状では実現可能性を慎重に見極めながら段階的に進めていく必要がある。以上のように、現時点での効果検証には多くの限界があるものの、限られたデータからも協力学生の成長を示唆する声が確認できている。効果検証の方法については、今後の実践を通じて段階的に確立していく必要がある。

6 おわりに

本研究は、山梨大学における学生参画型高大接続事業の実践を報告し、高大接続・入試広報活動における学生参画の新たな可能性、特に協力学生の成長を主要な目的の一つとして位置づけることの意義を考察することを目的とした。本プログラムの特徴は、従来の入試広報活動における学生参画が「大学広報・入試広報に学生視点を入れる」という観点から行われてきたのに対し、協力学生の教育効果を主要な目的の一つとして位置づけた点にある。

2 年間の試行を通じて、以下のような成果が得られた。第一に、学生の関与度が段階的に深化し、企画立案から運営までを主体的に担う体制が構築された。第二に、GI との連携により、組織的な協働体制が整いつつある。第三に、1-2 年生を中心とする協力学生の確保や、前年度参加者が新たな協力学生となるなど、活動の継続性が高まっている。また、限られたデータからではあるが、協力学生からは企画・運営力の向上や大学への理解深化、コミュニケーション能力の向上といった成長を示唆する声が聞かれており、これらは正課外活動としての本プログラムの教育的意義を示唆している。

一方で、いくつかの課題も明らかになった。プログラムの運営面では、医学部からの協力学生が少ないなど学部間での偏りの解消や、効果的な引継ぎ体制の構築が必要である。また、教育効果の検証においても、より体系的なデータ収集や分析方法の確立が求められ

る。これらの課題に対しては、現在の予算・人員体制の制約を踏まえつつ、実現可能なことから段階的に取り組んでいく必要がある。今後は、プログラムの安定的な運営体制を確立しながら、教育効果の検証方法についても模索を続けたい。

本研究は学生参画型高大接続プログラムという新しい試みの初期段階における実践報告であり、その教育効果の検証は緒に就いたばかりである。しかし、本研究にはこれまで補助的な役割とされてきた入試広報活動における学生参画に、教育的意義を見出す可能性を示し、正課教育とは異なる文脈で、学生の主体的な学びを促す機会となり得ることを示唆した点に意義があると推察され、これらの知見は、今後の高大接続・入試広報事業の新たな展開可能性を示すものといえる。

注

- 1) 本稿では「協力学生」という用語を使用しているが、これはアドミッションセンターが実施主体となるプログラムに協力して企画・運営を中心的に実施する学生という意味で学内の用いている呼称である。
- 2) 各大学の実施内容は参考文献に示す各大学（北海道大学及び旭川医科大学は北海道教育委員会）の URL を参照した。
- 3) 志望動機や志望順位を直接問わなかったのは、新入生アンケートをプレースメントテスト（アンケート形式）学修観の設問の一部を使って行っており、設問を新設した際は本稿で提示した学生参画プログラムを詳細に検討できていない段階だったからである。より正確な実態の把握に向けて志望順位に関する設問の追加を検討している。
- 4) 学生参画型の高大接続プログラムは、センター設置時から模索されていた。具体的には山梨大学生活協同組合（生協）との連携である。生協は大学構成員が出資金を出し合い組合員となり、協同で運営・利用する組織である。そこには、生協の理念に共感した学生組合員にて構成される組織として生協学生委員会（GI）があり山梨大学にも存在する。GI は生協の理事会直下に設置され、1-2 年生が中心となり、書籍購買部や学生会館食堂、本部などと並ぶ組織であり、履修相談会やスポーツ大会、新入生説明会や新入生歓迎パーティや自転車点検など、学生のニーズに基づき学生生活を支援している。しかしながら、組織の違いやセンターが注力していた対象の違いなどから GI との連携は実現しなかった。なお、山梨大学生活協同組合や全国大学生協連、生協学生委員会に関する上記記述は参考文献に挙げた URL から引用した。
- 5) その他の運営上の課題として以下が挙げられる。第一に、プログラム参加者の確保である。2023 年度は対面イベントが復活する中でのオンライン開催となり、参加者が減少した。これを受け、2024 年度は 8 月下旬の 1 回開催とし、教員に

よる説明会との連続開催など実施形態の見直しを図り 44 名の参加があった。第二に、協力学生の安定的な確保である。現状は学内掲示による自主的な応募に依存しており、「高校生時の参加→1 年次での協力→2・3 年次でのリーダー的役割」という望ましいサイクルの定着が課題となっている。第三に、2023 年 10 月に発足した大学本部の「学生広報スタッフ」との関係性の整理である。大学広報と入試広報の連携は従来からの課題であり、両者の効果的な協働方法を模索する必要がある。

参考文献

- 福島大学 「福島大学の今を伝えるメッセージ」 プロジェクト
https://www.fukushima-u.ac.jp/press/H24/pdf/39_06.pdf (2024年11月5日).
- 群馬大学 学生広報大使
<https://gundai-sa.gunma-u.ac.jp/html/about.html> (2024 年 11月5日).
- 平井佑樹・一ノ瀬博 (2024) 「アドミッション専門人材について学ぶ教養科目の開講とその成果—履修者が授業の演習として入試広報活動に参加することの効果—」『大学入試研究ジャーナル』 **34**, 38—43.
- 北海道教育大学 授業づくり体験会
https://www.hokkyodai.ac.jp/images/info_topics_hue/00019300/00019301/20231018094218.pdf (2024年11月5日).
- 北海道教育委員会 「メディカル・キャンプ・セミナー」
https://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/kki/medicalcamp_new.html (2024年11月5日).
- 茨城大学 入試広報学生スタッフ
https://x.com/ibadai_nyushi (2024年11月5日).
- 金沢大学 「高大接続ラウンドテーブル」
https://kugspro.adm.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=2209 (2024年11月5日).
- 喜村仁詞・大塚 智子 (2020) 「学生が創る学生募集広報—理論検証型手法から理論生成型手法への転換—」『大学入試研究ジャーナル』 **30**, 66—73.
- 京都工芸繊維大学 「オープンキャンパス」
https://www.kit.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2024/07/oc2024_timetable.pdf (2024年11月5日).
- 永田純一 (2011) 「在学生による入試広報活動の取り組み—広報効果と人材育成の観点から—」『大学入試研究ジャーナル』 **21**, 91—96.
- 島根大学 入学前セミナー
<https://nyucen.shimane-u.ac.jp/kodai-jigyuu/seminar.html> (2024年11月5日).

東京外国語大学 TUFSAンバサダー

<https://www.tufs.ac.jp/admission/events/tufs-connect.html> (2024年11月5日).

和久田千帆 (2018) 「学生の出身高等学校訪問—島根大学の事例から—」 『大学入試研究ジャーナル』 28, 239-244.

山梨大学 (2022a) 「第4期中期目標・中期計画」

https://www.yamanashi.ac.jp/wp-content/uploads/2017/07/4_chumoku_chukei_R5henkou.pdf (2024年11月22日)

山梨大学 (2022b) 『令和3年度山梨大学学生生活実態調査報告書』 ※学内限定公開

山梨大学生生活協同組合「GI(学生委員会)について」

https://text.univ.coop/puk/START/yamanashi/welcome/welcome_144.html (2024年11月5日).

全国大学生協連「大学生協とは？」

<https://www.univcoop.or.jp/coop/info/index.html> (2024年11月5日).

全国大学生協連「学生委員会とは？」

<https://www.univcoop.or.jp/activity/committee/index.html> (2024年11月5日).